

石狩油田

石狩では江戸時代末期の安政5（1858）年、箱館奉行石狩詰所の役人が、望来海岸に油の浸出をみて山中に油田の存在を確認していました（写真1）。

その後、油田の権利は何度か移転し、明治36（1903）年、横浜のインターナショナル石油会社が本格的な油田開発を始めました。峻別・五の沢でボーリングを行い、数本の良質な油井を掘り当てましたが、埋蔵量が少なく間もなく停滞してしまいました。明治44（1911）年、油田は日本石油（株）に譲渡され、以後「日本石油（株）石狩鉱場」と呼ばれるようになりました。



写真1 今も石油が滲出（八の沢）

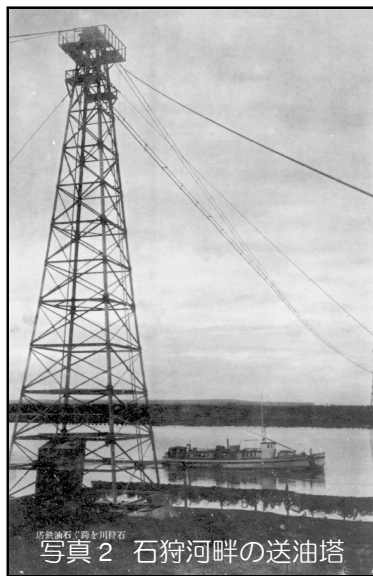


写真2 石狩河畔の送油塔

この年、同社は軽川（手稲）駅隣に、敷地約19haの「北海道製油所」を建設しました。油田から石狩川河畔（来札）までパイプ油送、石狩川の渡河は長い間、舁を使用しました。昭和3（1928）年、空中にワイヤロープを張り、石狩川を渡河させました（写真2）。油田から精製工場まで約30kmをパイプライン（原油は直径約5cm、ガソリンは3.3cmパイプ）で結び、全区間の流送が可能となりました（この製油所は昭和20（1945）年7月20日、米艦載機の空爆、石油タンク7基と工場焼失）。

昭和4（1929）年が石狩油田の最盛期でした。年間産油量10,000キロリットル、油井188抗、従業者は250人を超えていました。しかし、総埋蔵量が少ないため昭和8（1933）年には、新規ボーリングを中止してしまいました。既存の油井の汲み上げのみでは、年間産油量が5,000キロリットルを下回るようになりました。

昭和16（1941）年、日本は太平洋戦争に突入、南方アジアからの石油がストップし石油が一番欲しい時代でした。国策会社の「帝国石油」が石狩油田事業を総力で支援しましたが回復できず、年産3,000キロリットルに止まり、従業員数は60人に減少してしまいました。

昭和30（1955）年頃になると、原油生産量は年間1,800キロリットルを下回ってしまいました。ついに昭和35（1960）年、58年間にわたる油田の歴史が閉じられました。

（神林 勲）

- (1) 石狩町（1985）石狩町誌／中1．石狩町。
- (2) 石狩町（1991）石狩町誌／中2．石狩町。
- (3) 高岡開基百年記念史編集委員会（1984）開基百年記念史．高岡開基百年記念事業協賛会。
- (4) いしかり暦編集委員会（2001）いしかり暦14号．石狩市郷土研究会。
- (5) 21世紀に伝える写真集編集委員会（2002）石狩市21世紀に伝える写真集．石狩市教育委員会。
- (6) 蓑輪早三郎ほか（1968）手稲町誌．札幌市。